

「草木品」(『妙』『薬草喩品』)の思想解明〔上〕

——「『般若経』の“巻き返し”」の“コンペ”——

荻谷 定彦

はじめに

ここに「草木品」(oṣadhī-parivarta)を考究するに際して、本品は現行「法華経」——『写本集成』の全ても含め——において、第一段長行部・偈頌部(『土田本』114, 1~123, 2)と、第二段長行部・偈頌部(123, 3~130, 26)とからなるが、その場合、『妙法華』のみは、第二段長行部・偈頌部——『正法華』や『添品妙法華』、さらに『チベット訳』には存するにも拘らず——を全く欠くという、現行「法華経」全体において極めて特異な品なのである。しかも、それだけでは無く、その所説内容においても、先行する「譬喩品」や「信解品」に比して、複雑、怪奇で、一体、“何”を言わんとしているのか、その主旨は捉え難い。この点に充分に留意して考究したい。

【I】

本品は次のように始まる。

- 〔1〕さて、世尊(=釈尊)は尊者・大迦葉とその他の大声聞らに告げた。『迦葉よ。善い哉。善い哉。お前たちが如来たちの保有する(bhūta)“特性(について)の称讃”(guṇa-varṇa)を語るとは。じつに善い哉』(と)。(114, 1-6)

これは、冒頭の文であるにも拘らず、釈尊はいきなり迦葉らに『お前たちが“如来の保有する特性”を称讃するとは、じつに善い哉』と言っているからには、これに先立って、どこかに何らかの“仏徳称賛”の言辞が存しなくてはならない。では、一体、“それはどこにあるのか”、と求めるに、勿論、それは先行の「信解品」に存すると見るより他は無く、「信解品」の末尾に存する〔偈55〕～最終〔偈62〕がそれであると考えられる。即ち、

- 〔偈55〕(たとえ、それが)多・コーティの劫に亘る奮励努力であったとしても、“誰が”(世尊の行業=衆生教化)に報いることが出来ようか。(いかなる者であろうとも)いずれは死んでゆくこの世にあって、じつに為し難きところの、斯くの如きの極めて為し難きことを(世尊は)為しておられるのである。
- 〔偈56〕手でもって(=合掌して)、足でもって(=跪いて身を屈め)、頭でもって(仏の御足につけて礼拝するも)、(この世尊の行業に)報いることは不可能である。(さらには)洹河沙の如き劫を満たして、頭上に、肩に(仏の像を)頂いていても、
- 〔偈57〕(また)堅い食べ物、柔らかい食べ物、着物、飲み物、また寝台や座具、淨らかな上衣を布施するとしても、さらに旃檀造りの精舎を造らせ、一對の数物を敷きつめて布施する(としても)、
- 〔偈58〕常に善逝に多種類の“病を癒す藥”(gilāna-bhaiṣajya)を“供養”(pūjā)として布施するとしても、(しかも)それらが洹河沙の劫にわたって(なされるとしても)、いかなる時間をかけようとも、それによって、報いることは不可能なのである。
- 〔偈59〕“偉大なる人”(mahā-ātman, =聖人)の特質(=dharma)を備え、並ぶものの無い(威力を)身に備え、大なる神通力を有し、忍辱の力に確(固として)住している仏陀たち、偉大なる王者、汚れないジナは、斯くの如き愚者ども(=一切衆生)の(教化に)耐えておられる。
- 〔偈60〕(即ち)このように(諸仏は)常時、斯くの如き愚者どもに順応されており、(中でも)“取相の行人”(nimittā-cārin, =愚かな出家修行者)らに教法を説かれている(のである)。(諸仏は)一切の世界において自存者であり、(いかなる一切)法においても自存者にして、偉大なる自存者、世界(の衆生を)指導する“インドラ”なのである。
- 〔偈61〕(さらには)衆生(=出家修行者)の住する境地(=修行の段階)を明晰に認識しておられ(prajñā)、(それに応同した)多種多様な“所修正行”(pratipatti)を提示されているのであり、それらの者どもの(多様な)“強い志向”(adhimukti)を認識して、数千もの事由(hetu)を(挙げて、一人ひとりに相応した一つ一つの)教法を説かれているのである。
- 〔偈62〕時に、如来たちは、一切処において、衆生、つまりブドガラ(輪廻する生類)らについて、その主体的宗教行動(caryā)を明晰に認識しておられるから、(その衆生の各自の“(様々な)強い志向”(adhimukti)

に応同して、まずは)それら衆生の一人ひとりに適応した多様な教法を述べる(のであるが)、(最後には)この“最高の正覺”(agra-bodhi、=ここでは「大乘・菩薩乘」(その中核は『般若経』)の明かす「さとり」)を説き明かすお方なのである。

これら八偈は、「信解品」の所説内容とは全く無関係で、まさしく本品の長行〔1〕にいう「如來の保有する特性」の称讃である。故に、この㊦(〔偈58〕～〔偈62〕)は、本品の冒頭の㊧長行〔1〕の前文として、二品に跨るけれども、全くの別人によって造作され、ここに付加・挿入されたものに違いないのである。それでは、“どうして”このような㊦と㊧が造作されたのかと考えるに、恐らく、本品を創作した“一人の比丘”は、これを「法華経」のどこに持ち込むか、苦慮したのであって、それというのも、先行する「譬喻品」の説く「三車火宅喻」は、かつて住していた大邸宅が燃えていると聞いて、駆け付けた長者は火宅で夢中になって遊ぶ近所の子供らに、門外には鹿、羊、牛の曳く車があって、好きな車を与えると行って、誘い出し乍ら、逃れ出た子供ら全員に“等一の牛車”を与えたと言って、仏の説いた三乗のうち、声聞乗、独覺乗は“方便”の行使による「仮の教え」であり、「大乘・菩薩乗」はその“方便”を捨てて説かれた「真実の教え」であると主張しており、続く「信解品」では、突然、長者の大邸宅の門前に立った貧乏人を一目見て、長者はその者が五十年前に失踪した自分の実の息子と明晰に認知するも、“生まれが全てを決定する”という四姓制度——今日のカースト制度の祖型にして、すでに当時、バラモン教という宗教権威の下、インド(原住)民族全体を規制していた——に従って、密かに屋敷の奥に匿い、二十年間も糞尿除去の下請人として従事させた後、最後には、長者はこの者が自分の息子であることを世間に公表して、長者の莫大な財産を相続させたと説いていて、これらはいずれも「如來の保有する功德」の称賛などとは全く無関係の事柄であったからである。しかし、丁度、車両の連結器のように、「信解品」の末尾に割り込ませて、「信解品」と本品「草木品」とを連結するべく、造作したものに相違ないのである。

【Ⅱ】

(1)

こうして、本品は、次の〔2〕の文段——尤も、出だしの「大迦葉よ」

という発語、のみならず、これ以降に出てくる「大迦葉」の語の全てを除く——でもって始まっているのである。

- 〔2〕迦葉よ。①(凡そ)如来は法(dharma, 存在するもの=一切衆生)の主宰者(-svāmin)、一切法(=一切衆生)の“王”(rāja)、支配者(prabhū)、自存者(vāsin)である。②如来が如何なる教法をどこに下し置く(upanikṣipati, =説く)(とも)、それはじつに“如実”(tathā eva, =真実)である。如来は一切の教法(sarva-dharma)を道理に適って(yuktya)説示し、下し置く。如来の智に基づいて下し置く。じつにそれらの教法は“一切知者”(=仏)の境地に赴くように、そのように下し置く。そして、③如来は一切の教法の目指すところ(sarvadharmā-artha)と、帰結(gati)とを明確に観照している(vyavalokayati)。④(その上に、すでに、自身は)一切の教法の目指すところに自在を得た者(-vaśita-prāpta)、一切の教法に対して増上意樂を得た者(-adhyāśaya-prāpta)、一切の教法の決択に巧みな智慧の完成に到達した者(-viniścaya-kausalya-jñāna-parama-pāramitā-prāpta)である。⑤一切知者(=仏)の智を(衆生に)説示する者(sarvajña-jñāna-saṃdarśaka)、一切知者の智を理解させる者(-avatāraka)、一切知者の智を下し置く者(-upanikṣepaka)である。
- (114, 6-15)

これは、如来とは、一体“如何なる者であるか”を述べるものであり、上述の現行「信解品」の末尾の㊦(〔偈55〕～〔偈62〕)をより一層、敷衍して述べているのであって、ここにいう「如来は一切衆生の“主宰者”、乃至、“一切の教法を道理に適って説く者”」とは、一見、一神教における万物の創造主にして、唯一絶対者である神に対比して、我々人間はその神の僕であり、神の課する“ミッション”(使命)のままに行動するという「神の、神による、神のための宗教」と思えよう。が、決してそうではない。ここにいう一切衆生の主宰者、王、支配者とは、周知のように、『ウパニシャッド』に言うところの、大宇宙の「根源的一者」たる『梵』('brahman', これは、万物の創造者に非ず)を指す語であり、その上で、この『梵』と、小宇宙たる我々人間の根源的一者たる『我』('ātman')との“合一”という神秘体験の境地、そこで得られた「絶対的自由」、それこそが『解脱』(mokṣa)、即ち、“真の人間完成”に他ならないというものである。しかし乍ら、『ウパニシャッド』は、あくまでも、バラモン教の司祭者——それは勿論、バラモン階級の者に限られる——のなかから、祭儀

執行の現場を離れて、思弁の独立を果たしたところの所謂“『ウパニシャッド』の哲人”たちの語った「奥義書」であって、バラモン階級出身の者のみが師匠から弟子へ伝承されてきたものであり、しかも、その上、上述のように、インドに侵入してきたアーリア人は、この当時、すでにインド(原住)民族の殆ど全てを「四姓制度」の籬^{たが}でもってがっちり^{たが}と締め付けていたのであった。それ故、“バラモン階級以外の者”がこの『ウパニシャッド』の哲人たちの発見し、そこに到達した“解脱”(=真の人間完成)を獲得するためには、まず始めに四姓制度、つまり、今日にいうカースト制度という籬の外に出ること、即ち、インド以外の世界には全く例を見ない“出家”——妻子、親、親族、さらに自己の身分、財産等を始めとする、凡そ世俗の一切の放棄——が必須であって、仏陀・釈尊も例外ではなく、29出家、六年苦行、35成道の後の四十五年間の「説法教化」、80入滅という出家者の生涯を送ったのである。その場合、バラモン階級以外の出自者で、“解脱”を求める出家の宗教者は“沙門”(śramaṇa)と呼ばれ、彼らの宗教は“沙門の宗教”であり、仏教に謂う“六師外道”は全て、この沙門の宗教に他ならず、しかも、『ウパニシャッド』とは根本的に異なっており、彼らの全ては、各自のその獲得した“解脱”の境地を「耳ある者は聴くべし」と広く世間に公開したのであった。

それ故にこそ、ここで①「如来は一切法(=一切衆生)の“主宰者”、“王”、“支配者”である」と言い、②「如来の説き明かす一切の教法は“真実”(tathā eva)であり、その一切の教法を道理に^{かな}適って説示し」、③「その一切の教法の“目指すところ”(artha)」は一切衆生は一切苦からの解放であり、その“帰結”は正覚の獲得(=成仏)に他ならず、如来はそのことを「観照している」故に、④「如来はすでにその目指すところに自在を得た者」、乃至、「巧みな智慧の完成に到達した者である」と言うのである。続く⑤「その一切知者の智を(=衆生に)示す者、…理解させる者である」は、一見、オリジナル『法華経』『仏乗品』の「仏智による衆生洞察(=直観)」、即ち、“一切衆生本来からばさつ”を衆生に示し、理解させ、悟認させ、仏智に(至る)道に導き入れる」(37.6-14)に基づくと思えようが、しかし、本品には、オリジナル『法華経』の〈仏乗〉については、一切、それこそ一言半句の言及も無いのであるから、ここでは、ひたすらに、仏教における如来(=仏陀・釈尊)の保有する特性を説き明かしているだけなのである。

(2)

この〔2〕を承けて、

〔3〕迦葉よ。(A) ㉑如来・応供・等正覚者は、譬えるに、丁度、次のようなのである (tad-yathā 'pi nāma)。㉒迦葉よ。この三千大千世界には、様々な色合いの、様々な品類の「草、灌木、〔oṣadhi,〕木等」が、(即ち) ㉓様々な名称をもった“oṣadhi-群 (-grāmā)”が大地に、あるいは山、山岳、峡谷などに生えている (jātāḥ) (のであって、) そのあらん限りの (yāvantaḥ)、㉔その「雲」、㉕大量の水の充満したもの (mahā-vāri-paripūrṇaḥ) が湧き起るであろう。㉖湧き起って後、三千大千世界の全て (sarvāvātīm) を覆い尽すであろう。(B) ㉗そして (ca)、覆い尽して後、一切処に、同時に“水” (vāri) を注ぐであろう。㉘迦葉よ。その場合、この三千大千世界にある「草、灌木〔oṣadhi,〕木等」は (ye)、㉙その場合、若くて柔らかな茎や枝、葉、(をもったもの、) 中位の茎、枝、葉をもったもの、さらに、堅くて確りした茎、枝、大きな葉 (padāśa) をもった「草、灌木、〔oṣadhi,〕木等」、(さらに) (小) 樹 (druma)、大樹 (mahā-druma) などの (ye)、㉚その当の全てのものら (sarve te) は、かの大雲から注がれた (大量の) 水を (各自の) 力量に応じて (yathā-balam)、(その生えている) 場所に応じて、〔㉛“水-要素” (ab-dhātu) を〕吸飲するであろう (ものである)。㉜そして、それら (= 「草、灌木、木等」と (小) 樹・大樹) は、(そこに水の) 充溢するところの同一の雲によって注がれた“一味の水”によって、〔㉝種子に応じて (yathā-bījāḥ)〕漸次に、生長し、〔芽を出し (virūdhī)〕大きく (vipratām) 成長する。㉞そして、同様に (tathā)、花、果実を産み出す。㉟そして、それらは各自に様々な名称を得るのである。(C) ㊱そして、その当の全ての (te sarve) “oṣadhi-群 (-grāmāḥ)”は同一の台地に存立しているもの (eka-dharaṇī-pratiṣṭhitāḥ) であって、㊲“一味の水によって潤されたもの (eka-rasa-toya-abhiṣyanditāḥ) なのである。(114, 15-115, 8)

この文段は、㉑～㊲の十七もの短文で構成され、じつに様々な事柄が述べられている。が、しかし、全体として首尾一貫する文脈は見出し難く、数々の疑問が存する。中でも、最大の疑問は、突如「草、灌木、'oṣadhi', 木」という一連の複合句——これは「法華經」全体において、当品の第一段長行部のみに存し、六度も出てくる——があって、しかもそ

の中の 'oṣadhi' の原義は一体“何”かということである。それというのも、『モニエル辞典』に 'a herb, plant simple, esp. any medicinal herb' (236a) とあり、『梵和大辞典』でも、「植物、本草；藥草：一年草；」(303b) とあるからである。

そこで、この 'oṣadhi' を㊦ただの「草」(herb)、「植物」(plant) と解すると、それは、たちまち「草、灌木、'oṣadhi'、木」という一連の複合句の中の「草」(tṛṇa) と“どのように” 区別されるのかという新たな疑問が生起する。一方、㊧これを“薬効のある植物”と解するとしても、その場合——諸『日本語訳』の全ては、「藥草」と訳しているが、これは、恐らく『妙』の「藥草喻品」という題名に盲従したものであろう——には、「草」(tṛṇa) であれ、「灌木」であれ、さらに「木」であれ、それが薬用に供されるならば、全て「藥草」と称しうるのであるから、それら「草…木」とは全く別に、「藥草」という一つの独立した範疇（同じ部類に属するもの）は、本来からして全く存在せず、そのようなものが、「草」や「灌木」、さらに「木」が、一目見てそれぞれ各自に同一の範疇に属すること明白な中であって、“どうして” このように公然とそれらと並記されているのか。これまた極めて不可解なのである。

しかも、その上、この後の偈頌部にあっては、「草、灌木、'oṣadhi'、木」という複合句は全く無く、全ては「草、灌木、木」であり、それも二箇所だけに存するのであって、同じ第一段であり乍ら、長行部と偈頌部でこうも明白に異なるのは、一体“なぜ”なのかという、新たな疑問が、ここでも起る。さらには、その上、このような状況の中で、これら多様な疑問点の解決を求める場合、そこには看過できない制約が存する。即ち、なんと、「法華經」全体において、この 'oṣadhi' は、二十八度存するなかで、二十七度は、当品のみに出るということである。それ故に、これらの疑問の解決には、ただただ続く〔4〕以下のテキスト本文の精読をもってするより他ないのである。そこで、この長い文段を (A)、(B)、(C) の三つのブロックに区分けして、考究する。その場合、区分の根拠は、“水”の語であって、(A) ブロックは、元から乾季の終りに出現した雲について言うものであるから“水”は全く出てこないが、(B) は、雨季に入って出現する雲を主題とするのであって、その本来的に保有する水について、'vāri' という語が用いられている。その他に 'ab-dhātu' という語が一度だけ存する。が、しかし、'ap' は「法華經」全体において、こ

の当該箇処に一度だけ出るものなのである。それに対して、(C)では、何と‘toya’という原語が、それも、この当該箇処に一度だけ出てくるのである。そこで、順次にそれら三つのブロックに相当する箇処を精読して、この(A)、(B)、(C)と併せもって精査して、疑問の解明を目指す他はないのである。

【Ⅲ】

(1)

そこで、始めに、この〔3 (A)〕のブロック(即ち㉔～㉙。但し、㉔、㉙は除く)と、それに相当する〔4〕～〔6〕とを精読し、それと併せもって考究するに、

〔4〕迦葉よ。じつにこのように (evam)、如来・応供・等正覚者は(この娑婆)世界に出現するのである。(即ち)大雲 (mahā-megha) が湧き起るように、そのように、如来もまた(世に)出現して、天・人・アスラと共なる世界のあらゆるもの全てに、“音言” (svara, 雷鳴) でもって(その出現を)知らしめる。(115, 9-11)

ここに謂う“大雲”は、乾季の終りになって、一刻も早き雨季の到来を待ち望んでいる大地に、その雨季到来の直近なるを標徴するものである。この大雲が三千大千世界をすっぽりと覆い尽し、雷光を発し、雷鳴を轟かすという、この自然界の織りなす壮大な事象を捉えて、これこそは長行〔2〕に謂う「凡そ如来たる者の保有する特性 (guṇa)、即ち、仏が世に出現しては、ひたすらに“衆生教化”に邁進するという“仏の行業”そのものであるという“感興” (udāna) が生起したのであり、その想いの圧さえ難しくして、思わず^{ほとばし}進り出たものこそが〔3- (A) -㉔～㉙〕なのである。即ち、この乾季から雨季への“移り替り”は、極めて僅かな時の経過であるけれども、そこに、仏は次から次に世に出現しては衆生教化をなし、そして入滅していくという、全ての仏の素晴らしい行業を見てとった“一人の比丘”が、湧き出た大雲の発する雷光と、雷鳴に擬えて語り出したものなのである。そして、その所説内容を詳細に述べるのが、続く〔5〕、〔6〕である。

〔5〕迦葉よ。(それは)譬えるに、丁度 (tad-yathā ‘pi nāma)、大雲が三千大千世界の遍く全てを覆い尽くすように、迦葉よ。じつにそのように (evam) 如来・応供・等正覚者は、その当の三千大千世界の(衆生に)

面と向って、次のような (evam) “音声” (śabda) を発する。(即ち、私の) “声” (ghoṣa) を聞かしめるのである。『天と人との尊者 (=比丘・比丘尼) らよ。如来にして応供・等正覚者は (すでに、彼岸に) 渡った者 (tīrṇaḥ, 『土田本』は 'tīrṇāḥ' なれど、『版本』 'tīrṇaḥ' を採る) であり、(未だ渡っていない衆生を彼岸に) 渡らせるのであり、(同様に) 解脱した者であり、(…) 解脱させるのであり、安息を得た者 (śvasta) であり、(…) 安息を得せしめるのであり、般涅槃した者で、(…) 般涅槃せしめるのである。私 (今仏釈尊) は、この (苦なる) 世界と彼の (さとの) 世界とを等正覚知でもって如実に、明晰に認智している。“一切知者”、“一切を現証している者” (sarva-darśin) である。(それ故に) 天と人との尊者らよ。教法聴聞のために私の下に参集されよ。私は (正覚に至る) 道の “語り部” (ākhyātr)、道の説示者 (mārga-desika)、道を知る者 (mārga-vid)、道を (説き) 聞かせる者 (mārga-śrāvika)、道に通達した者 (mārga-kovida) である』(と)。(115.11-21)

ここに、三千大千世界を覆い尽くした“大雲”について、先の〔3-(A) -③〕では「大量の水の充満したもの」(114.9) と言っていたが、〔4〕は勿論のこと、ここなる〔5〕、のみならず、次の〔6〕でも、そのようなことは一切、言及されていない事柄であって、このことは、決して看過されてはならない。なぜなら、ここに湧き起った大雲は雷鳴を轟かせて、それは丁度、日本で相撲興行開始の前日、“呼び出し”が太鼓を打ちながら町中にふれ歩く“触れ太鼓”のように、如来出現直近なるを広く世間に知らしめて、『そこでなされる私の説法を聴聞するべく、会座に参集せよ』と呼び掛けているからである。しかも、その場合、『凡そ仏たる者、自らは、すでに「彼岸」(さとの境地)に渡り終った者にして、その上で今度は、未だその彼岸に渡っていない者を渡らせているのである』と言っており、これはじつに、一神教が、キリスト教で言えば、神は唯一絶対者であり、イエスはただただ神の命ずる“ミッション”(使命)のままに、それを衆生に伝える“使徒”に過ぎないという「神の、神による、神のための宗教」である。一方、それとは全く違って、仏教にあっては、私は「あくまでも自らはすでに「彼岸」に渡り切った者であるからこそ、今度は未だ渡っていない者を渡らせているのだ」と言うのであり、これは、仏教に限らず、インドの宗教全般の“知行双運”という絶対的基盤に依拠する「人間の、人間による、人間のための宗教」であることを明言し

ているのである。このことはオリジナル『法華經』「仏乘品」で謂うように、如来は衆生をして「正覚に向けて①“鼓舞”(samādāpana)し、その上で、②“成熟”(paripācana)せしめる者」、換言するに、一神教における“救済”では絶対に無く、あくまでも①“鼓舞”から②“成熟”への“済度”(=渡るのを救援すること)なのである。

これを承けて、さらに、次のように言う。

〔6〕そこで、多なるコーティー・ナユタ・百・千の生類は如来の教法聴聞のため参集する。さて、如来もまた(参集してきた)それら衆生の機根や精進努力に、それぞれの差異(=個々別々であること)を知って、それぞれの者に(各自に適応した個々別々の)法門を提供する。(即ち)(A)(一般民衆には)多様で、多彩な、喜ばしい、満足させ、歡喜を起させ、利益と安樂の生起をもたらず“教えの物語”(dharma-kathā, =世間に流布する人生訓や寓話を仏教的内容に翻案したジャータカ等の説話)を物語る。そして、その物語(の説く教え)によってそれら衆生は現世では幸福となり、死後には、そこで多なる快樂を享受しうる善趣(=天界と人界)に生まれる。(B)(それに対して、一部の参集者は、仏の説く)「教法」(dharma, =仏法)を聴聞する。聞いてのち、“障礙”を離れた者(vigata-nīvaraṇa, 世俗の一切を放棄した者=出家者)となり、順次に、能力に応じて、境界に応じて、力勢(sthāma)に応じて、一切知者の(説いた)教法に専念する(abhiyujyante)。(115, 21-116, 5)。

ここに、大雲に比せられる仏が、雷鳴という説法開始の“触れ太鼓”を打ち、それに応じて参集した人々に対して、仏はその機根や精進努力の多種多様なを明晰に認識して、それら衆生のそれぞれに応同した多種多様の法門を説くというのであって、(A)一般民衆には「教えの物語」、即ち、“プージャー”と呼ばれるインドの民族宗教——凡そ人は“聖なるもの”を礼拝供養することによってのみ善根功德(=因)を手に入れるのであり、それによって「現世安穩・後生善処」という果報がもたらされるといふ、インド(原住)民族の本来から有する固有の宗教心に基づく宗教——に依拠する“説話集”を語るものであり、これは“仏教”、即ち、“仏の語るもの”であっても、“仏に成る教え”とは決して言えるものではない。それに対して、(B)一部の参集者、なかでも、“バラモン階級以外の者”は仏の説く「教法」を聞いて「“障礙”——正覚獲得(=真の人間完成)の上での妨げ——を捨離した者」、即ち、世俗の一切——妻子、家、財産、身

分、社会、四姓制度とそれの細分化されたカースト制度——の放棄という反社会的行為、非人間的行為をなした“出家”の宗教修行者(=“バラモン”に対する“沙門”)となり、各自が能力に応じ、境界に応じて仏から与えられた教法に専念(=修行に精励)すると述べている。

以上が、本品の冒頭〔2〕から〔6〕に至る所説内容——それは、「“大雲出現”の喩」と称すべきもの——の全貌である。それ故、本品は、先行の「三車火宅喩」や「長者窮子喩」がオリジナル『法華經』の〈仏乗〉に猛反駁する『般若經』の“巻き返し”の一環であっても、全く別の者の手になる“後分”である。しかも、その上ここに明かされている内容は、凡そ如来たる者、その一員としての今仏釈尊も含めて、仏として備える特性、それは元より、成道後に為した「衆生に対する説法教化」という働き、——それは取りも直さず、“仏の功業”に他ならない——であって、一般民衆には、“プージャー”(=“聖なるもの”に対する礼拝・供養)という現世におけるその者のなす主体的宗教行為こそが、「現世安穩」という果報と、「後生善処」、即ち、「後生において人・天という善き境遇に生まれる」という果報とをもたらすというインド民族固有の宗教を説き、一方、それには飽き足らずして、“解脱”(=一切苦からの解放)という“真の人間完成”(=成仏)を求めて“出家”(=世俗の一切の放棄)した者”には、その成仏というゴールに到達しうる『真の仏法』(saddharma, 『正法』、但し、ここでは決して『法華經』の〈仏乗〉に非ず)を説いた、というこの“仏の働き”、それを見事に、このような乾季の終り近くなって、待ちに待った雨季到来の直近なることを告げるところの、大雲が湧き起り、三千大千世界を覆い尽くし、雷鳴を轟かせるという、この神秘的な大自然の事象に喩えて説き明かしているのである。このようにして、〔3-(A)〕と、それに相当する長行〔4〕～〔6〕とを併せ見ることによって、その所説内容を解明したのである。

以上のような(A)ブロックの精読に対して、諸『日本語訳』は“どのように解している”のかを見るに、

『岩本訳』カーシャパよ、如来は「さとり」に到達した阿羅漢なのだ。

例えばカーシャパよ、この三千大千世界には、(甲)さまざまな色をした、数多くの種類の雑草や灌木や薬草や喬木などが地上に、あるいは山や溪谷に生い繁っており、(乙)⑦また種々の名称をもつ植物の群落があるが、それらの上に④大水の満ちた⑤雲が立ちのぼり、三千

大千世界のすべてを覆いつくして、(丙) 到るところに一時に雨を降らすとしよう。(上、267. (甲) や㊦などの符号は引用者)

この訳については、次のような疑問が起る。①これでは、三千大千世界には、(甲)「さまざまの色をした…雑草や灌木や藥草や喬木」などの他に、(乙) ㊦「種々の名称をもつ“植物の群落”(oṣadhi-grāma)がある」と謂うことになるが、それでは、その謂うところの「植物の群落」とは一体、“何”であるのか。問われるまでもなく、「雑草灌木喬木」の他にそのようなものは存在する筈もない。さらに、②「雲」について、④「大水の満ちた」というが、上述したように長行〔3-(A)〕と〔4〕～〔6〕で謂うところの「雲」は、乾季の終りになって出現したもので、雷光を発し、その後から聞こえてくるゴロゴロという雷鳴をもって仏の教法説示に擬えているのであって、㊵「大水の満ちた雲」というのは、後の〔7〕に謂うところの雨季になって出現した雲のことであって、元々は〔3-(B) -①〕に出るものである。それ故、この「大水の満ちた」という文言は、後になってからここに持ち込まれた“後分”に他ならないのである。しかも、その上、③この「植物の群落」と訳された ‘oṣadhi-grāma’ は、この後の直下にもう一度出てくるが、そのところでは、「藥草の群落」(上、267)と、何の注記も無く、訳されている。これでは、‘oṣadhi-grāma’ に、㊶「植物の群落」と、㊷「藥草の群落」という全く異なった二つの訳語が出てくることになり、一体、“㊶と㊷のどちらを採る”のか、全く不明で、不可解極まりないのであって、『岩本訳』には、このような①～③の疑問が生起するのである。

次に、『中村瑞訳』を見るに、

『中村瑞訳』〔3〕迦葉よ、たとえば(甲) この三千大千世界にはいろいろな色彩の、多種多様の草や灌木や藥草や樹木があり、(乙) ㊦また種々の名をもつ植物の群落があって、大地に、あるいは山岳や峡谷に生えていて、④豊かな水〔分〕をいっぱい含んだ㊵雲が湧き上ってくるとしよう。(上、120)

とあり、〔3-(A) -㊶〕の冒頭の文段を『版本』や『土田本』に随従して、〔2〕の末尾に繰り入れている他は、全く『岩本訳』と同じである。

次に、『中公訳』を見るに、

『中公訳』たとえば、カーシャパよ、(甲) この三千大千世界には種々の色を異にし、種類を異にするありとあらゆる草や灌木や藥草や樹木が

あり、(乙)㊦また名前の異ったあらゆる植物の群があつて、地上に、あるいは、山岳や山窟にはえている。㊦また一方、多くの水を一杯に含んだ㊧雲が湧き上がってくるとしよう。湧き上がって三千大千世界のすべてをおおい、おおいつくしてから、(丙)いたるところで同時に雨をふらせるとしよう。(I, 149)

これは、なんと『中村瑞訳』とまったく同じである。

しかし乍らそれでは、これら三つの和訳が“‘oṣadhi’-群(-grāma)”を、“どうして”共に「植物の群落」と訳出しているのかと問うに、それは何の事はない、『妙』「迦葉 譬如三千大千世界山川谿谷土地 所生卉木叢林 及諸薬草種類若干名色各異」(19A27-29)とあり、この「及諸薬草」を(乙)㊦「また種々の名をもつ植物の群落」と和訳したものに違いないのである。ところが、この‘oṣadhi-grāma’は、この文段の直下にも出てくる(『現行本』115.8)のであって、そこでは、『岩本訳』と同様、なんと平然と「薬草の群落」と訳しているのであって、不可解極まりないものである。

『植木訳』カーシャパよ、〔それは〕ちょうど、この三千大千世界において、それほど多くの、さまざまな色の、さまざまな種類の草、灌木、薬草、樹木や、さまざまな名前の薬草の群落が、地上や、山や、岩の洞穴に生えているようなものである。そして、大量の水を含んだ雲が湧き起こるとしよう。湧き起こってから、三千大千世界のすべてを覆い尽くすとして。〔上、343.の下から3行目、345.の二行目まで〕

とあって、これは、まるで自動翻訳機による訳文そのままであって、これでは、「薬草の群落」とは、一体、“どのようなもの”なのか、と問われたならば、返答に窮する。

このような精読によって、この〔3-(A)-(C)〕の「様々な名称をもった“oṣadhi-群(-grāma)”」は、後に持ち込まれた異質の“後分”に違いないのである。その上、ここに至って、考えてみるに、これら『日本語訳』の(乙)㊦「植物の群落」(oṣadhi-grāma)という訳文は、ただそれだけに止まること無く、第一段長行部、続く偈頌部の‘oṣadhi’の全て、さらには、本品の題名たる‘oṣadhi-parivarta’の‘oṣadhi’も、これら全ては、これまで多くの先学者によって、公然と「薬草」と訳されてきているのであるが、しかし、「法華経」における‘oṣadhi’は決して「薬草」などではなく、「植物」、あるいは、「草木」という普通名詞の意味であること

を計らずも明白に表明しているのである。それというのも、もし 'oṣadhi' が元から「薬草」を意味するのであれば、すでに指摘したように、「信解品」の末尾に、本品との連結のために、わざわざ付加・挿入された㊦〔偈55〕～〔偈62〕のなかの〔偈58〕に、仏への布施の品物として 'girāna-bhaiṣajya' (疾病者の薬物、薬草) という語句が歴として存するのであるのに、“どうして” この 'bhaiṣajya' を用いなかったのか、という疑問を、ここに新たに生起させるからである。

こうして、ここに至って、'oṣadhi' の原義は、これら三つの和訳が示すように、「植物」、「草木」一般の意味であることが明白なのであり、そこからして、さらに憶測するならば、この一連の複合句は、元は偈頌部で謂うように「草、灌木、木」であって、長行部の「草、灌木、'oṣadhi'、木」の 'oṣadhi' は、——いかなる事由によるかは、目下のところ不明なれども、——ここに付加・挿入された異質の“後分”に違いない。さらに言うならば、本品の題名は、『現行本』では 'oṣadhi-parivarta' であるが、元はそうでは無かったのに、この 'oṣadhi' の挿入時点で、同時に変更されたのであり、しかも、その 'oṣadhi' は「植物」、または「草木」の意味なのである。

このようにして、〔3〕の残りの (B)、(C) のブロックについても、それに相当すると思われる長行段の所説内容を併せもって、考究されるべきもののなのである。

〔Ⅳ〕

(1)

ところが、この〔6〕に続く次の〔7〕を見るに、

〔7〕迦葉よ。丁度、あたかも (tad-yathā api nāma) 大雲が三千大千世界のあらん限りの全てを (sarvavatīm) 覆って後、(そこに生える草…木に) 等しく水 (vāri) を注ぐ。そして、全ての「草、灌木、〔薬草、〕木」を水でもって満足させる。そして、それら当の「草、灌木、〔薬草、〕木」は (それぞれの) 能力に応じて (yathā-balam)、(生えている) 境界 (= 環境) に応じて (yathā-viṣayam)、(その折々の自身の) 力勢 (= 生育状態) に応じて (yathā-sthānam)、水を飲む (āpibanti)。そして、各自の有する寿命の量の限りに生きてゆく (gacchanti)。(116, 6-10)

これは、先の〔2〕～〔6〕が述べてきた「凡そ如来たる者の保有する

特性」、それは、今仏釈尊について言えば、29出家、35成道の後、80入滅に至るまでの四十五年間のただひたすらなる“説法教化”の偉業に他ならないのであるがそれを、乾季の終り近くになって、大雲が雷光を発し、雷鳴を轟かすことでもって、直近に仏が世に出現し、説法教化に邁進するという仏の行業に喩えて説き明かしていたのに、ところが、それとは全く異なっていて、雨季になって出現したところの大量の水を含んだ大雲が三千大千世界を覆い尽して、そこに生える一切の草木に雨降らして潤し、草木はその“一味の水”を吸飲するも、多種多様に繁茂するという自然界の事象に、仏の「説法教化」を擬えているのであって、それ故に、じつに〔2〕～〔6〕の“仏の保持する特性の称讃”とは全く異質の“後分”に他ならないのである。それというのも、この〔7〕は、先の〔3- (A)〕の述べる「『大雲出現』の喩」を、「ただ単に雨季の到来直前の自然界の事象を述べたに過ぎない」と受け止め、それに異議申し立てをして、雨季になって出現した大雲のもたらす大量の水によってこそ地上の草木は繁茂するのだという「喩」に“大變容”、というか、激変させているのである。その上で、このことを少しでも隠蔽せんとして、〔3- (A)〕に、大雲について「大量の水の充満したもの (mahā-vāri-paripūrṇa)」という文言をあらかじめ“布石”として打ち込んでおいたのであった。そこで、この〔7〕の所説は、大雲のもたらす“一味の水”を飲むという事と、それにも拘らず、その一味の水を飲み乍ら多種多様の草木が繁茂するという事とは、それ自体、自家撞着に陥っているものであり、その事は問わないまでも、『それが、一体、“どうしたと言うのか”』と、開き直って反問するに、それについての回答は、全く得られないのである。しかも、その上、このような異質の“後分”の付加・挿入は、これ以降の本品の所説内容を激変させているのである。

ところが、これまでなされてきた先学ら本品の考究は、このこと、即ち、〔1〕～〔6〕が、乾季の終りに出現した大雲の話であるのに対して、この〔7〕は、雨季の始めに出現したところの大量の“一味の水”を含んだ大雲こそが、雨を地上の草木に降り注ぎ、その“一味の水”を飲むも多種多様の草木が繁茂するという話に“大變容”、というか、“激変”させているのである。が、それにも拘らず、それに全く気付いていなかったのである。かく言う自分自身も、不覚にして、今、ここに至るまで、これ程明白に認知するところではなかったのである。それでは、一体、このよ

うな“大變容”は“どうして”生じたのかと、問われようが、“^せ急いては事を仕損ずる”であって、これ以降の所説の検討を待つ他ないのである。

(2)

そこで、続く〔8〕を見るに、

〔8〕迦葉よ。じつに、如来・応供・等正覚者がこのような教法を (evam
…yad dharma, 即ち〔7〕で、「雨季の始めになって出現した大量の水を含んだ大
雲こそが、地上に生える多種多様の草木を繁茂させるのだと) 語られた場合の
その教法であるところの (yad dharma)、その当の教法 (sa dharma) は
全て“一味” (eka-rasa)、即ち (yad uta)、解脱味、離貧味、滅尽味で
あって、“一切知者の智”を究極点とするものなのである。(116, 10-
13)

これは、「如来がこのように語るところのその当の教法は、全て“一
味” (eka rasa)、即ち、「^{ゆい}唯一の (eka)」、「最高の」、「最勝の」味 (rasa, 精
髓)」にして、“解脱味”、乃至、“滅尽味”、即ち、仏教にいう「一切知
者”(=仏)の智”を究極点とするものに他ならない」と明言している。
但し、「その当の教法」は、あくまでも「大乘・菩薩乗」(その中核は『般若
経』)こそ「^{ゆい}唯一”、“最高”、“最勝”の乗である」と主張する『般若
経』の“巻き返し”の一環なのである。それ故に、この〔8〕は〔7〕
の主旨を全く理解すること無き別人が持ち込んだ異質の、「信解品」自体
が“後分”であるからして、それに対して、これは“第二次の後分”に他
ならないのである。

(3)

次に、この〔8〕に続く〔9〕を見るに、

〔9〕迦葉よ。その場合、(A) それら衆生 (=〔8〕の出家の比丘ら) が如
来の語る教法を聞き、憶持し (dhārayanti)、專念する (abhisamṃyujyante)
ところの、(その当の) 彼らは、自分では自分自身 (の“何”であるか)
を知らず (na…jānanti)、認識せず (na…vedayanti)、覺知しない (na…budhy-
anti) のである。(B) それというのも、迦葉よ。じつに如来だけが
(eva)、それら衆生 (“何”であるかを) を如実に (tathā, =ありのままに明
確に) 知っているのである。(即ち) 彼らが“何もの” (ye) であり、彼
らが“どのように” (yathā) あり、彼らが“いかように” (yādṛśāḥ) あ
るかを (知っている)。(同じく) 彼らが“何”を思念している (cintay-
anti) のか、彼らが“どのように”思念しているのか、彼らが“何に

よって”(yena) 思念しているのかを。(同じく)彼らが、“何”を修習している(bhāvayanti)のか、彼らが“どのように”修習しているのか、彼らが“何によって”修習しているのかを。(同じく)彼らが“何”を獲得する(prāpnuvanti)のか、彼らが“どのように”獲得するのか、彼らが“何によって”獲得するのかを(知っている)。迦葉よ。その場合、じつに如来のみが“現証者”(pratyakṣaḥ, 明晰に見る者)、“明晰に現証する見手”(pratyakṣa-darsin)なのである。(C)(さらにいうならば)、(丁度)それぞれ各自の大地に存立する「草、灌木、[oṣadhi.] 木」には劣ったもの、優れたもの、中位のもの(‘hīna-utkrṣṭa-madhyamāna’ という差違)があるように、それら衆生(=出家の比丘ら)には(そのような三様の差違が存するのであって、そのこともまた如来だけが知っているのである)。(116, 13-23)

これは、先の〔6〕で「世に出現した如来は、『説法教化』を為すに当って、衆生の機根や精進努力に差違の存することを明晰に認識して、衆生のそれぞれの機根等に適応した『法門』を説示する」と言っていたが、ここなる〔9-(A)〕では、それら出家の比丘は、仏が説いた教法の中から、それぞれ自分に相応した教法を聞き、憶持し、それに専念しているにも拘らず、なんと比丘自身は「自分が“何”であり、“何を思念し”、“何を修習し”、それによって“何が獲得される”のかを全く知らず、認識せず、覚知しないのである」と言う。そして、それは“なぜ”かと言えば、続く〔9-(B)〕で、これら出家の比丘らは、仏の説いた教法に専念するも、インドにおける宗教全般の根本基盤たる“知行双運”に基づくその教法の明かす教義の領解(=“知”)が全く無く、また、その教義に基づく主体的な修行の実践(=“行”)も全く為さずして、それでいて教法に専念しているからであって、そのことを明晰に認識し、それを現証しているのは「じつに如来のみである」と言明して、これらの比丘が「自分が“何”であるか」等を全く知らないところのその事由を明らかにしているのである。それ故、これまた先の〔8〕とは、全くの別人が持ち込んだ“第三次の後分”なのである。

それに対して、続く〔9-(C)〕は、「大地に存立している『草、灌木、[oṣadhi.] 木』には、それぞれ劣ったもの、優れたもの、中位のもの(という差違)があるように(yathā)、その様に(tathā)、比丘らにも“三様の差違”がある」と言うところの“三様の差違”とは、声聞乗、独覚乗、

「大乘・菩薩乘」に他ならない。勿論、これら三乗のうちで「大乘・菩薩乘」こそ「唯一の乗」、即ち、“最高の”、“最勝の”乗であるというのである。しかし乍ら、ここに謂う「大地に存立する『草、灌木、[oṣadhi,] 木』」という文言は〔7〕にのみに出るものであり、しかも、上述のように、〔4〕～〔6〕とは全く異質のものである。このことから、この〔9-(C)〕は、これまた、全く別人の手によってここに付加・挿入された“第四次の後分”なのである。

(4)

さらに、これに続く〔10〕を見るに、

〔10〕迦葉よ。(A) (凡そ如来一般の、その一員たる) この当の私 (so' ham, = 今仏釈尊) は、唯一の教法 (= 『正法』)、即ち (yad uta)、解脱味 (vimukti-rasa)、涅槃味 (nirvṛti-rasa) を知って (viditvā) 涅槃を究竟とする者 (nirvāṇa-paryavasānam)、常に般涅槃を唯一の境地とする者 (ekabhūmikam)、虚空を終極とする者 (ākāśa-gatikam) にして、衆生の“(様々な) 強い志向” (adhimukti) を (一往は) 守る者 (anurakṣamāṇaḥ) である (からして)、じつに (成道の後) 直ちに (sahasā eva) “一切知者” (= 仏) の智慧 (jñāna) を説き明かすことはないのである。(116, 23-26)

これは、〔9〕が「如来一般」であったのを承けて、「この当の私 (= 釈尊) も全く同様である」と言うのである。そして「涅槃を究竟とする者」とは、初期大乘仏教(その中核は『般若経』)の説き明かすところの無余涅槃に到達した者であり、無余涅槃 (= 正覚) をもって“唯一の”、“最高の”、“最勝の”境地とするのであって、じつに「虚空を究極とする者」、即ち、『般若経』の明かすところの、“一切の法 (dharma, もの) は空・無自性”であるという境地を会得した者だ——これは、すでに〔2-③〕「如来は一切の教法の“目指すところ” (artha) と“帰結” (-gati) とを明晰に観照している」(114, 11-12) を承けたもの——と言うのである。ところが、それにも拘らず、仏は、その「一切知者」の智を成道後、直ちに衆生に説き明かすことは無かったのであって、“なぜ”かと言えば、一往は衆生の懐く“(様々な) 強い志向” (adhimukti) を守る (= 尊重する) 者であって、この“仏の正覚内容”は己の心中に秘めて、無闇に他人には洩らさない者だから、と言うのである。それというのも、インドにあっては、仏教に限らず、宗教全般は、一神教の、唯一絶対者たる神は万物の創造主

にして、それ故、凡そ衆生はあくまでも神の僕であるとする「神の、神による、神のための宗教」であるのに対比して、あくまでも、衆生の“知行双運”を根本基盤とする「人間の、人間による、人間のための宗教」であるからである。それ故、その宗教の開祖は、ただひたすらに己の覚知した所を衆生に説くだけであって、後は、それを聞いた衆生の一人ひとりがその明かす教義を領解(=“知”)し、それに基づく修行の実践(=“行”)たる主体的宗教行為に依るだけなのである。それ故に、この〔10〕は、これまた、先の〔9〕とは全く別人による“第五次の後分”なのである。

(5)

さらにこれに続く第一段長行部の最終文段である〔11〕を見るに、

〔11〕迦葉よ。お前たちが(今、これを聞いて)未曾有(の想い)を得、希有(の想い、=ここでは、不審の想い)を得たのは、(そもそもが)お前たちは(仏の“方便”の行使に依る)“密意趣に基づいて語られたもの”(saṃdhā-bhāṣita、=仏の懐く“深い意図”(saṃdhā)を己の心中に秘めたままにして語った“仮の教え”であって、それ故、仏の内に秘めた深い意図を)趣入することは出来ない(na śaknutha-avātaritum)(からである)。それというのも、迦葉よ。『如来・応供・等正覚者たちの“密意趣に基づいて語られたところのものは”(saṃdhā-bhāṣitānām)、(その仏の“深い意図”はお前たちにとっては)難解である』と(iti)(つねづね言われてきているからである)。(116, 26-29)

ここに、突然に、釈尊は『お前たち』と呼びかけているが、この「お前たち」とは、じつに冒頭〔1〕「世尊は尊者・大迦葉と、その他の大声聞らに告げた。『迦葉よ。善い哉。善い哉。お前たちが“如来の保有する特性”(について)の称讃を語るとは』」(114, 1-4)の、“お前たち”を指したものであって、それでこそ、この〔11〕でもって第一段長行部が終っているものであり、文脈はまさしく、首尾一貫するのである。

但し、そうは言っても、続いて、「お前たちは趣入することが出来ない」という、‘na śaknutha-avātaritum’の‘na’は、『中村瑞訳』がコメントするように(上、262)、テキストに、有るのと無いのとがあって、どちらを採るか、決めかねるのである。そこで、諸『日本語訳』を見るに、

『岩本訳』「余は世の繫縛からの解放と平安という味をもち、「さとり」

の境地に達することを究極の目的とし、常に完全に平安で、同じ根

拠に立ち、「空」に到達する教えを知ってはいるが、人々の意向を大切にす故に、仏の智慧を突然に説き明かさないのだ。何故ならば、もし突然に仏の智慧を説き明かすならば、汝らは奇異の念にうたれ、不思議に思うて、如来の深く微妙な言葉を悟ることができないからだ。完全に「さとり」に到達した如来たちの深く微妙な言葉は理解しがたいのだ」と。(上、271.273)

これは、「現行本」(=『版本』も同じ)のままに‘na’を採っている。しかし、それでは、“どうして”「奇異の念にうたれ、不思議に思うて、仏の…微妙な言葉を悟ることができない」のか、極めて訝しい。それ故、これは全く逆で、「仏の微妙な言葉を理解できない」からこそ、「奇異の念にうたれ、不思議に思うたのである」と、すべきものである。

『中村瑞訳』迦葉よ。そなたたちは如来の密意をもって説かれたことに深く入り、よく理解することができたから、そなたたちは驚き、かつ稀有なことと感じたのである。なぜならば、迦葉よ、もろもろの如来・応供・正等覚者が密意をもって説かれることは〔そなたたちには〕理解しがたいものだからである。(上、123)

これは、「如来が密意をもって説かれたことに深く入り、よく理解することができたから」と、『岩本訳』とは反対に、‘na’を欠く『P本』を採り、さらには『妙法華』に随順している。が、しかし、もし、そうであるならば、この後の直下に「如来…が密意をもって説かれることは〔そなたたちには〕理解しがたいものだから」と、忽ちにして自家撞着に陥る。それ故、この訳は受け入れられない。

『中公訳』カーシャパよ。お前たちは(「声聞たちもまた、仏陀となりうる真の仏子である」と聞かされて、)奇特の思いに打たれ、驚嘆すべきことと感じた。それは、お前たちが、(もともと)如来が深い意味を秘めて語られたことばをさとることができないからである。なんととなれば、カーシャパよ、正しいさとりを得た尊敬されるべきもろもろの如来たちが深い意味を秘めて語られたことばは、(お前たちにとっては)まことに理解しがたいものだからである。(上、153)

これは、全体として、一体“何を言わんとしている”のか、全く意味不明の訳である。それというのも、①「お前たちは(「声聞たちもまた、仏陀となりうる真の仏子である」と聞かされて、)」と言うが、そのような事はこれまでの叙述のどこにも全く説かれていない。それなのに、“どうして”

突然に、ここに持ち出してきたのか。全くもって“奇っ怪千万”なのである。さらには、②お前たちは「奇特の思いに打たれ、驚嘆すべきことと感じた。それは、お前たちが、(もともと)如来が深い意味を秘めて語られたことばをさとることができないからである」と言うが、これは、一体“どういうことか”。そうではなくて、「如来の……ことばをさとることができたから」ではないのか。これまた極めて“奇っ怪千万”と言わざるを得ないのである。それにも拘らず、ここに「さとることができない」と言うのは、直下に「如来の……ことばは、(お前たちにとっては)まことに理解しがたいものだから」という文言と合致せざるを得ないからであつたに違いないのである。

〔植木訳〕カーシャバよ、あなたたちは奇異なる思いにとらわれ、驚嘆すべき思いに満たされている。というのは、あなたたちは如来が深い意味を込めて語られたことを理解することができないからである。それは、どんな理由によつてか？ カーシャバよ、正しく完全に覚った尊敬されるべき如来たちが深い意味を込めて語られたことは、理解し難いからである」と。(上、349)

これは、訳者自身がこの〔11〕の所説内容を十分に理解できなくて、ただ自動翻訳機の訳文をそのままに記したように思える。

ここにおいて、このように諸『日本語訳』のどれにも疑問を懐かせられるのは、そもそもが“声聞”について、始めから、例せば、先行する「信解品」が示すように、“声聞”は「下劣な(hīna)“強い志向”(adhimukti)を懐く者」(102.26)という偏見に立つての上での叙述であつて、それ故にこそ、先の〔10〕で「凡そ如来たる者、一往は、衆生の(この下劣なる)強い志向を守る者(adhimuktim sattvānām anurakṣamāṇaḥ)である」と言い、その上で、この〔11〕で、成道後、直ちに「“一切知者”の智(=正覚内容)を説き明かすことはないのである」と言うのであつた。これを承けて〔11〕では、仏が「お前たち(迦葉等の大声聞ら)は、このような『(仏の深い)密意趣に基づく所説(saṃdhā-bhāṣita)』を語つたとしても、その(真の仏の意図など)到底、理解できるものではない」と断言しているのである。このことは、すでにオリジナル『法華経』『仏乗品』の、それも、『法華経』本来の個処ではなくて、「譬喻品」や「信解品」と同様、『般若経』の“巻き返し”である“後分”の箇処で、「如来は“(様々な)強い志向”を懐く(adhimukta)衆生の意向(āśaya)を知つて、様々な

“能演 (= 説法というパフォーマンス) の顕示” (abhinirhāra-nirdeśa) たる種々の原因…語源解釈等の“方便” (= 衆生に真実を明かすまでの暫定的な仮の手段、そしてその行使によって説かれた“仮の教え”) を用いて、“諸の教法”を説示してきた」(37, 30-38, 2) と言っているところである。このことから、「諸の教法」とは、この〔11〕「密意趣に基づく所説」であって、それは“方便”の行使によって説かれた“仮の教え”たる「伝統的正統派仏教」、即ち、声聞乗、独覺乗を指すのであり、それに対して、初期大乘仏教たる「大乘・菩薩乗」(その中核は『般若経』)は、その“方便”を捨てて説かれた“真実の教え”に他ならないと主張しているのである。それ故に、「お前たち大声聞らは、どんなに大阿羅漢であろうとも、“方便”の行使によって説かれた“仮の教え”である声聞乗の教法を聴聞し、憶持し、専念しようとも、それが“密意趣に基づく所説”である限り、そこに秘められた“仏の深い意趣”(saṃdhā)、即ち、“真^{まこと}の仏法”たる『正法』(saddharma、勿論、ここでは、『般若経』であって、決してオリジナル『法華経』の明かす〈仏乗〉ではない)は、理解することなど到底、出来ない」と断言し、「仏の“密意趣”は、お前たち大声聞らにとって極めて『難解である』(durvijñeyam)」と、止めを刺しているのである。ここにおいて、〔3-(A)-④〕の「雲」について、「⑤(即ち)大量の水で充満したもの(mahā-vāri-paripūrṇa) (114, 19) という文言は、この〔7〕～〔11〕の「雨季の始めに出現した雲が降り注ぐ“一味の水”によってこそ、地上の多種多様の草木は繁茂するのだ」とする『喻』に“大變容”させるために付加・挿入しておいた「布石」は、ここに至って、まさしく磐石の重鎮としてその役目を見事に果たしているのである。

このように理解する時、この〔11〕は、これまた、先の〔10〕に反駁して、それとは全くの別人が先行の〔2〕、〔3-(A)〕、さらに〔4〕～〔6〕で説く“如来の保有する特性”に反対するべく、持ち込んだ異質の“第五次の後分”に他ならないのである。

おわりに

こうして、ここにおいて第一段長行部は終る故に、綜括するに、冒頭〔1〕、〔2〕、〔3-(A)〕、さらに〔4〕～〔6〕で述べられる“如来の保持する特性”に対して、〔7〕～〔11〕で、次々に五度に亘って、この「如来の保持する特性」に対しての異説を繰り出して、それをめぐっての

一大“コンベ”(競演会)が開催されているのである。このことは、〔7〕～〔11〕で説かれているところの、雨季に出現した大雲のもたらす“一味”の大量の水を飲み乍ら、多種多様の草木が繁茂するという「喻」に、完全に“大変容”していることを明白に示しているのである。しかも、それにも拘らず、①品名は「草木品」(oṣadhī-parivata)であり、②「草、灌木、薬草(oṣadhi)、木」という複合句が六度もあり、さらには、③'oṣadhi-群(grāma)'は二度存するが、諸『日本語訳』は、始めの箇処では「草木群」と訳し乍ら、後では「薬草群」と訳されているのであり、④『妙法華』でも「薬草喻品」と題されているのである。しかも、その上、⑤雨季に出現した大雲のもたらす“一味の水”について'veri'が多用されているなかであって、〔3-(B)〕では'ap'が、〔3-(C)〕では'toya'が、現行「法華經」にあつては、いずれも当該箇処にただ一度だけ出てくるのであつて、このように①～⑤の疑問点が存するのである。これは一体、“どうしたことであろうか”。極めて“奇奇怪怪”である。しかし、そんなことは“御構い無し”に、長行部はここで終ってしまっている。それ故、この〔7〕の「大雲のもたらす“一味の水”と多種多様の草木の繁茂という喻」は、ここに持ち込まれた、それも全く異質の“後分”に相違ないのである。それ故、この“異質の後分”の付加・挿入は、一体“いかなる”事由に依るのかは、続く偈頌部の精査の他には、その解明する手懸りは全く無いのである。

「補記」

これに続く第一段偈頌部の考究は「『草木品』の思想解明〔下〕——〈仏乗〉に対する『般若經』の逆襲——」(『興隆学林紀要』第二十一号、令和六年三月刊行)を見られたい。